

△樹里安だより

ジュリアン

vol.31



—安行の名所 (その18)—

武南桜で囲まれた

江川運動広場 《川口市赤山 1143》

赤山街道（県道越谷鳩ヶ谷線）と首都高速川口線が交差する西側に設置されている運動広場は、実は調整池が主目的。普段は多目的に利用するため、テニスコート4面、ゲートボールコート2面と少年サッカー場、ソフトボール場が設けられているが、もっと地域のために活用しようと、地元で「武南桜を復活させる会」を結成、運動広場の周囲800mにソメイヨシノ等、桜80本を植栽し、大事に育てている。

運動広場は、赤山地区を流れる江川の洪水対策として昭和59年から6カ年計画で、総事業費2億2千220万円を投じて建設された。

桜の植栽は、昔、赤山街道2キロにわたってソメイヨシノの並木があり「武南桜」と呼ばれ親しまれてきた。その並木が道路拡張工事で切り倒され、消失したままとなっていることから、この運動広場を足がかりに復活させていこうというもの。

植えられた桜が成長し、たくさん花を咲かせるようになれば、花見客も訪れるようになり“花の赤山”をPRできることだろう。昔あった赤山街道の桜並木の風景が少しでも復活することを期待している。

西立野の ヒマラヤスギ (川口市西立野157-1)

住宅や緑地に囲まれた小高い丘の最も高い所に周囲を見下ろすようにそびえているので、近くにある県指定の文化財・西福寺三重塔も低く見える。樹高16.5m、胴回り2.5mの大木だが、平成19年4月の保存樹木指定時の測量値だから、今ではもう一回り大きくなっているだろう。樹齢はわからないが、所有者の榎本 寛さんは、以前、住んでいた人から大正時代には、もう植えられていたと聞いていたから、優に100年は超えているだろうという。

ヒマラヤスギは、名前どおりヒマラヤ北西部の山地原産のマツ科の常緑針葉樹。樹高は20~30m、幹の直径80cm~100cm、大きいものは高さ50m、直径3mにもなる大木。日本に入ってきたのは明治12年(1875年)、イギリス人が種子を日本に持ち込み、その後苗が新宿御苑などに多く植栽されたという記録がある。

この木が、なぜ川口のこの地に? 西立野は植木の里安行の一郭にあり、昔から植木業者が多く住んでいた。新宿御苑へは仕事で出入りしていたことから、珍しい外国の木を育ててみようという苗を譲り受けて植えたのではないだろうか、推察される。

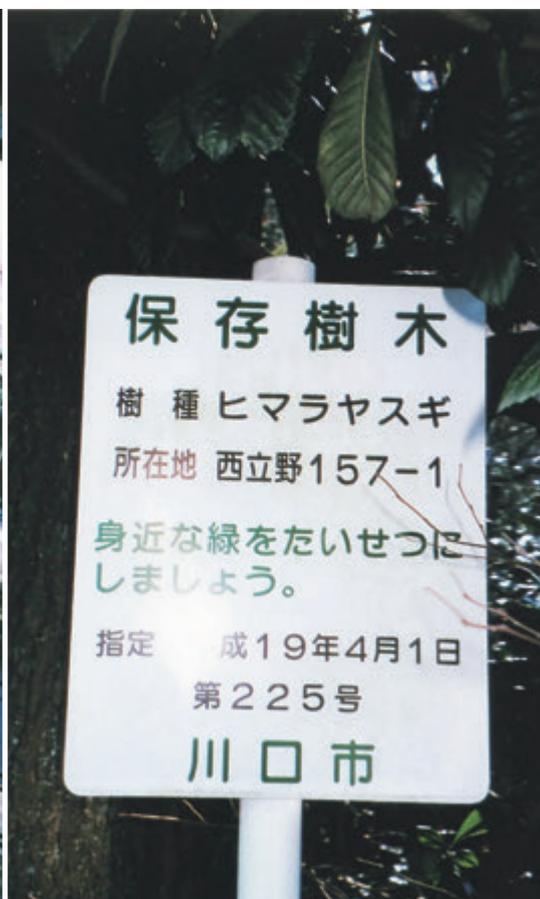
榎本さんは、20年ほど前、緑に囲まれた環境の中で生活したいと東京から引っ越ししてきたが、その時、玄関わきの道路沿いにあるこの木を見て、すっかり気に入ってしまった。以来、落ち葉や枯れ枝の掃除や2~3年毎に費用をかけて枝打ちを行うなど管理をしてきた。しかし、落ち葉や枯れ枝のほか、時には松脂が霧のようになって降るので、近所に迷惑をかけているのではないかと気になり、市役所のみどり課へ相談を持ちかけ調査してもらったところ、貴重な緑化木

と判定され、平成19年保存樹木に指定された。榎本さんは「緑の少ない東京では息がつかまってしまうので、こちらへ移ってきたかいあって、この木とめぐり会うことが出来ました。どっしりと構えている姿を見ると力強く、心身ともに癒されます。緑の大切さをアピールしてくれる木でもありますから、後世に残していけるよう大切に守っていきたい」と毎日のように愛情のこもった眼差しで木を見上げている。



ヒマラヤスギ マツ科

- 分布（原産） ヒマラヤ地方～アフガニスタン
- 樹高 最大で40～50m
- 雌雄同株の常緑針葉樹
- 用途 主には庭園樹、街路樹として、世界3大庭園樹の1つに数えられている。
- 樹形は円錐形であり、幹は直立し枝は上から横へ大きく曲がる。
- 樹皮は濃茶色又は黒色。
- 枝垂れや若葉が黄金色の品種がある。
- 針葉樹の中では比較的成長速度が早く、新宿御苑や芝の増上寺などで大変大きな個体を見ることが出来る。



西立野のヒマラヤスギ

| 樹種 | 科名 | 指定年月日 | 指定番号 | 所在地 | 幹周 | 樹高 |
|--------|-----|---------|------|-------------|------|-------|
| ヒマラヤスギ | マツ科 | H19.4.1 | 225 | 川口市西立野157-1 | 2.5m | 16.5m |





《川口の鉢物文化》

「シクラメンで鉢物園芸の名高める 川口鉢物園芸生産組合」

年末年始の贈答用に、また室内のインテリア草花として重宝がられているシクラメン。まさに冬花のアイドル的存在だ。その花が、植木の里・安行でも生産され、今では鉢物園芸農家の主力生産物となっている。

安行で花の鉢物の生産が始まったのは、昭和44～45年ごろ。国の政策で稲作の減反が行われたため、それまで生産していた米や野菜などからシクラメン、ゼラニウムなどの草花や鉢植えのカイドウ、君子蘭などの鉢物生産に切り替えた。当初は、シクラメンなどの鉢花は地元ではまったく認知されず、そのころは植木の景気もよかったので「シクラメンなどの草花をいじったりして、あんなことで商売になるのか」と陰口をたたかれたこともあった。しかし、昭和50年に流行歌「シクラメンのかほり」がヒットしたことも幸いして、結果的に草花の鉢物は当たった。

そこで、効率よく栽培し産地化を図ろうと昭和51年、農家の若者6人が集まって「川口鉢物園芸生産組合」を設立、当時暑さに弱い品種が多かったシクラメンのために長野県軽井沢の土地を借り受け、安行・軽井沢のリレー栽培に乗り出した。こうした努力が実り、都内のデパートや園芸店からの引き合いも増え、産地として確立することができた。

リレー栽培は平成5年ごろで打ち切られた。往復の輸送に時間と手間がかかり、地方にも新たな生産地ができたこと、また品種改良で暑さに強い品種が作出された上、栽培技術の向上で、地元だけの栽培で十分対応出来るようになったからだ。

品種が多いうえ、豪華な花で人気を保ってきたシクラメンも平成に入ってからバブル崩壊の影響で売れ行きが鈍りだし、それに温室燃料の重油の値上がりなどが追い打ちをか



け、生産者を苦しめている。だが、生産者たちはシクラメンの合間にパンジー、ペチュニア、デージー、プリムラなどの花壇草花を栽培して出荷し、経営維持に努めている。

生産者は「せっかく築きあげてきた産地を無くすわけにはいかない。今は忍の一字だ。このような時だから“より高品質、よりタイムリーな商品”をモットーに、消費者のニーズに合った鉢花を作っていけば、展望も開けるだろう」と話している。



川口市内で生産されている主な鉢物の種類

シクラメン パンジー ビオラ スイートアリッサム ストック プリムラ類 等

【パンジー】

スミレ科 一年草 ヨーロッパ原産 和名 サンシキスミレ
花期 秋（11月）～春（5月）

花つきがよく花色も豊富で、また花壇・ハンギングバスケット・コンテナガーデンなど用途も広く人気が高く、また寒さなどにも強く初心者でも育てやすいことから園芸シーンには欠かせない花です。

【園芸豆知識】

パンジーとビオラは、園芸上は区別されていますが、学術的な違いはありません。一般的に大きな花をパンジー、小さな花をビオラと呼んでいます。花の大きさには諸説ありますが5 cm以上がパンジー、5 cm以下がビオラといわれています。





退院・快気祝い

キンカン

(ミカン科 キンカン属)
(常緑広葉樹・低木・陽樹)



古代の中国で、キンカンは幸運を約束するしるしであった。病気を克服した記念樹としてふさわしい木である。昔からキンカンの鎮咳効果はよく知られ、また、果肉、果皮ともに各種の無機質やビタミンを含み、カロチンも多い。さらに血管を強化する効果も認められている。緑の葉と金色の実で親しまれるこの木を、病後の慰めと健康を願う気持ちをこめて、身近に植えたい。

1. 特徴

開花期5～6月、結実期11～1月。鉢植えでも実をよくつける。

2. 植えるときの注意

時期 5～6月

場所 暖地に適するので、関東以北では鉢植えにして室内で育てる方がよい。土質は特に選ばない。

3. 管理のポイント

初夏から夏にかけてアゲハチョウの虫害に気をつける。

《他の木》



ツバキ

常緑広葉樹
小高木～高木・中庸樹



アオキ

常緑広葉樹
低木・陰樹・雌雄異株



エンジュ

落葉広葉樹
高木・陽樹



モモ

落葉広葉樹
小高木・陽樹

参考：日本緑化センター 木を植えよう 記念樹にふさわしい木とそのいわれ



川口緑化センターの主なイベント開催結果報告

1 第20回緑と大地の豊年まつり

平成23年11月5日（土）～6日（日）

20回目となる今年も川口市農家組合連絡協議会と共催で開催いたしました。緑化センター会場では北海道滝上町物産販売、山形産りんご ラ・フランス販売、静岡県川津物産販売を実施し、植物取引センター会場では、新鮮野菜直売コーナーや模擬店、各種のステージショーが催され、来場者到大変好評を博しました。



2 第3回秋の並木元町公園花植木市

平成23年11月12日（土）～13日（日）

川口緑化産業団体連合会と共催でアリオ川口に隣接する並木元町公園で秋の植木市を開催いたしました。紅葉や実物等の植木やシクラメン等の販売の他見頃を迎えるモミジの品種展示も併せて行い、安行植木のPRを図りました。



3 第9回緑の学会・ふれあい講演会

平成24年1月29日（日）

例年農業や緑化に造詣の深い著名人をお呼びしている緑の学会に今年は造園家の涌井雅之氏を講師としてお招きし「緑化に『環境革命』の思想を埋め込む」をテーマにご講演をいただきました。

当日は多くの方が講演をお聞きになり、参加者へ緑化の普及・啓発が図られました。



4 第51回川口市花の文化展

平成24年2月24日（金）～26日（日）

川口特産の花弁園芸の総合的な紹介・宣伝を目的に今年も川口緑化センターや総合文化センター等の会場で開催されました。

市内生産者による枝物花材の展示やその枝物を使用した生け花の展示等が行われ、会期中は多くの来場者で賑わいました。





花を愛する作家たち

(その2)

人類の誕生するずっと以前からこの世に生存している花木は、人間の最高の友ともいわれる。それだけに人間の生活との関わりは深く、文学、絵画、宗教などあらゆる分野に影響を与えてきた。花木と人間との関わりを紹介してみよう。

竹久夢二（1884年～1934年）と宵待草

「待てど暮らせど来ぬ人を 宵待草のやるせなさ こよひは月も出ぬそうな」。夢二は、旧制早稲田実業高校に在学中、懸賞募集の投稿画に入選したのをきっかけに画業の道に進み、新聞社や雑誌社のコマ絵や風刺画を描いた。明治42年、最初の夢二画集「春の巻」を発行し、「夢二式の美人」なる言葉を生んだ。憂いに満ち寂しげな容姿だが、その多くに紅梅やスミレなどが挿入されている。夢二にとって美人画に花は欠かせない存在だったろう。宵待草の詩集は大正7年、楽譜会社から出版され、浅草オペラで歌われて好評を博し、全国に広まったという。歌の宵待草は実はマツヨイグサだったそうだが、やはり宵待草でないと味気ない歌になってしまう。

北原白秋（1885年～1942年）と花の人生

「からたちの花」「この道」など白秋の詩歌はロマンチックな香りの高い花々で飾られている。大正2年発行の処女歌集の表題も「桐の花」。前年、人妻との恋愛問題で収監された白秋は、その歌集の中で「^{くれない}紅の天竺牡丹ぢっと見て^{みこも}懐妊りたりと泣きてけらずや」「^{ひとや}しみじみと涙して入る君とわれ^{つまくれ}監獄の庭の爪紅の花」と痛恨の悲しみに涙しながら花を詠んだ（爪紅とはホウセンカ）。明治・大正・昭和に生き、詩歌の世界に画期的な功績を残した白秋は、晩年、眼疾に冒され、治療のかいなく花の人生を閉じた。

太宰 治（1909年～1948年）と月見草

井伏鱒二に師事して小説家となり、独特の説話体や饒舌体の手法で新鮮な印象を与え、作家としての地位を固め、「斜陽」「桜桃」「人間失格」などの作品を発表、若い人たちのアイドルとなった。反面、入水心中するまでに心中未遂、自殺未遂など何回も繰り返すなど私生活は乱れていた。昭和13年、山梨県御坂峠の天下茶屋に居留した際「富嶽百景」を書き下ろした。その中で富士山と対峙し怯まずすくっと立つ草姿に感激、「富士には月見草がよく似合う」と書いている。これが句碑となり、今も峠に立っている。この月見草はオオマツヨイグサだが、夢二の宵待草と同じく月見草の方がよく似合う。



ジュリアン

 **樹里安** 

川口緑化センター・道の駅「川口・あんぎょう」

発行日：平成24年4月1日

発行：公益財団法人 川口緑化センター
〒334-0058 川口市安行領家844-2
TEL 048-296-4021

ホームページ： <http://www.jurian.or.jp/>